



Title	John・F・Kennedy の演説にみられる分離不定詞のレトリック効果
Author(s)	福本, 広光
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 57-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91581
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

John・F・Kennedy の演説にみられる分離不定詞のレトリック効果

福本 広光

1. はじめに

アメリカ合衆国 (以下米国) 第 35 代大統領である John・Fitzgerald・Kennedy (1917-1963, 以下 Kennedy) は、歴代大統領の中でも国民からの人気が高く、評価も高い人物の一人であるとされる。任期途中に暗殺されてしまったこともあり、大統領であった期間は 3 年弱と比較的短いものの、彼の人気の要因の一つとして、その若さや優れた政治的手腕もさることながら、人を惹きつける力を持った演説にあるといえるだろう。

本稿では分析項目として分離不定詞 (split infinitive) を扱うが、分離不定詞とは、*to* 不定詞を構成する不定詞マーカー *to* と原形動詞の間に副詞(相当句)が挿入された以下(1)強調部に該当する語法である。英語圏における規範主義に照らし合わせると、現代英語においてもその使用の可否を巡っては議論を巻き起こすことが往々にしてあるようだ。

(1a) I'd like **to really understand** philosophy.

(Swan 2017: 145)

(1b) He began **to slowly get up** off the floor.

(*ibid.*)

本論では Kennedy による演説原稿を言語資料として、そこに出現する分離不定詞の機能ならびに効果に関して、修辞技法、レトリックの一つとしての側面から説明を加えることを試みたい。

議論は、以下の手順で進める。第 2 節で先行研究を概観し、本研究の位置付けを行う。第 3 節にてデータと調査手法について説明し、第 4 節ではそれぞれ認知言語学と音韻 (英語のリズム) の観点を軸とした枠組みを概観し、複数の事例に当てはめながら分析・考察を行う。第 5 節では研究をまとめつつ、今後の展望を述べる。

2. 先行研究

分離不定詞は伝統的に、「英語圏における規範主義と実際の使用の乖離」という点から注目を集めがちな文法項目であるが、本格的な研究対象とされることはあまりなく、研究書においても簡潔な言及にとどまっている場合が多い。しかし近年は多様な言語コーパスの普及に伴い、機能的観点からの研究 (Close 1987) のほか、実態の記述を目的とした大規模コーパスを用いた量的分析 (e.g. Perales-Escudero 2011)、通史的調査 (Calle-Martín and Miranda-García 2009)、英語教育への応用事例 (e.g. Phoocharoensil 2012) や所謂「世界英語 (World Englishes)」における分離不定詞の振る舞いを調査分析した研究 (Gonzales and Dita 2018)、現代英語の話し言葉コーパスを用いた量的・質的観点を組み合わせた研究 (廣田 2021) など、実証的研究が充実しつつある。

一方で、大統領の演説などの政治的談話を言語資料として活用した分離不定詞研究は極めて少なく、さらにそれらに対して認知言語学の見地を援用した視点からの分析は、管見の限りほぼなされていない。演説を始めとする政治的談話は発信者たる政治家による、聞き手に対する何らかの強いメッセージや意図が含まれていることが常である。筆者は、そこに含まれるいわゆる「破格的」な文法構造に対しても何らかの意味があり、それらを採用することでメッセージの伝達に何らかの有用性が生じると考えており、使用の動機を複合的な視点から分析するのは妥当かつ必要なことと考えている。

上記により、本研究は演説という媒体に含まれる分離不定詞の持つ(文体・修辭的)有用性を分析し、当該分野のケーススタディの一端を示すものとして機能することが見込まれる。

3. データと調査方法

調査にあたって使用したデータは、ヴァージニア大学、Miller Center が開発した *Presidential Speeches* というオンライン上のデータベースである。これは、就任演説や一般教書演説をはじめとした「米国大統領」としての演説原稿のほか、テレビ番組での討論、企業や兵士、大学生に向けて送られたスピーチのクリプトなど、バラエティに富んだ談話データが収録されていることに加え、現在も順次データの更新が進んでいることが特徴である。Kennedy の項には、全部で 44

種類のスピーチが収録されており、それら全てに Brill Tagger を用いてそれぞれの Plain text に品詞標識を付与してコーパスとした。そして当該のデータを AntConc (ver 4.1.1.) にかけて、分離不定詞に該当する検索式から構造を検索し、用例文を収集した。

4. 分析

上記の手法に基づいて検索を行った結果、コーパスから抽出された分離不定詞の用例は 10 本の演説からわずかに 13 件のみと、極めて少ない結果となった。さらに、就任演説や一般教書演説から収集された用例は一例もなかった。調査に使用したデータは Kennedy の政治的キャリアの一部に過ぎないことを加味しても、彼が政治的なディスコースにおいて分離不定詞を活用する機会は非常に稀なものであったことが推察される。しかしながら、それは却ってどのような場面で、どのような効果を狙って Kennedy が分離不定詞を使用したのかを綿密に分析する動機につながり得る。以下では、質的観点から収集された全用例をその用法ごとに分類し、文脈 (コンテキスト) も適宜踏まえつつ考察を行う。

4.1. 副詞の意味を強調する効果

一般的な機能文法の観点からは、分離不定詞を使用する有益性は *to* 不定詞に挟まれる副詞がどの動詞を修飾するかを明確にするということが頻繁に指摘される (e.g. Huddleston and Pullum 2002: 582)。一方、分離不定詞を使わなければ文意に曖昧性が生じる文脈はそれほど多くなく、実際の用例も必ずしもそのような局面でしか出現しないわけではない。そもそも副詞は「飾りことば」としての意味合いが強いので、仮に政治演説というテキスト内でメッセージを正確に伝達することに集中するならば、*to* 不定詞を、副詞を用いてわざわざ修飾する必要はなく、言語規範的に制限を受け、自身の「無教養」を晒しているともとられかねない、分離不定詞を殊更に用いる理由は限られてくる。つまり、この構造を用いることで、大統領は自身の主張点や強調点を聴衆に印象付けてアピールしているのではないかというのである。¹

尤も、今回収集することができた Kennedy が用いた分離不定詞の用例の中にも、その動機が「別の語順にしてしまうと適切な文章にならないため」という理由で「やむなく」分離不定詞になっていると捉えられるものもある。以下の 3 例は、1961 年 5 月 25 日に行われた、“The Goal of Sending a Man to the Moon” という演説からの抜粋であるが、中でも(2)はそれに該当する。

(2) In short, these new plans will allow us **to almost double** the combat power of the Army in less than two months, compared to the nearly nine months heretofore required.

ここでは *double* は「倍増させる」という意味の動詞で、副詞 *almost* はそれを修飾するが、*to double* を修飾する要素として *almost* を機能させるためには、この間に置くのが最も適切ということになってしまう (換言すれば、別の位置に置くと英文としての容認性が大幅に下がるということ)。しかし本節で主に扱うのは、このような場合ではなく、他の箇所において文が成立するか否かにかかわらず「敢えて」分離不定詞にしている、というパターンであり、残り 2 例はそれに該当すると考えられる。

(3) The Office of Civil and Defense Mobilization will be reconstituted as a small staff agency to assist in the coordination of these functions. **To more accurately describe** its role, its title should be changed to the Office of Emergency Planning.

先ほどとは異なり、*to* と動詞 *describe* に挟まれた副詞句 *more accurately* は動詞(句)の後ろに置き換えても、ここで文意が変化するということはない。しかし、民間・国防動員局のタイトルの変更という局面において、「その役割をより正確に表現する」という目的を前面に押し出して説明することが可能になる。

¹ 機能言語学の点から、分離不定詞は有標 (marked) な語法とみることも可能だろう。Givón (1995: 28) は、分布上稀な、低頻度の形式 (有標) は、高頻度の形式 (無標; unmarked) と比較して、文内において際立った (salient) 存在であることを述べている。調査では Kennedy の演説中における「分離不定詞を避けた方の用法」の頻度を実際に数えてはいないが、分離不定詞が使われている用例よりも多いことはほぼ自明と言ってよい。

(4) But in my judgment, this is a most serious time in the life of our country and in the life of freedom around the globe, and it is the obligation, I believe, of the President of the United States **to at least make** his recommendations to the Members of the Congress, so that they can reach their own conclusions with that judgment before them. You must decide yourselves, as I have decided, and I am confident that you finally decide in the way that I have decided or not, that your judgment — as my judgment — is reached on what is in the best of our country.

本用例は、演説の結論部において、まとめとして自身の見解を述べる場面である。Kennedy は、国民に負担を強いる予算計上を議会で行うことを不本意であるとしつつも、当時が米国、そして世界中の自由の生活における最も重大な時期であることを強調し、米国大統領として最低限自分のなすべきことを主張するのである。

make 以下の要素を修飾する際には、統語的観点からすると *at least* は *to* と *make* の中間に入れざるを得ない要素であろう。しかしその要因のみならず、ここでは、Kennedy が *at least* を *to* 不定詞に挿入し、分離不定詞の形にしてまで、米国大統領としての自身の任務や矜持を強調したいという意志のあらわれである、と捉えられよう。従って、本用例は(2)と(3)のパタンの中間に位置付けられるとした。

この動機に類する例としては、例えば次のようなものがある。

(5) Mythology distracts us everywhere — in government as business, in politics as in economics, in foreign affairs as in domestic affairs. But today I want **to particularly consider** the myth and reality in our national economy. In recent months many have come to feel, as I do, that the dialog between the parties — between business and government, between the government and the public — is clogged by illusion and platitude and fails to reflect the true realities of contemporary American society.

(Commencement Address at Yale University, 1962/6/11)

当演説では、政府の規模と分配、公的財政政策、ビジネスと米国に対する国民の信頼という経済問題に焦点を当てている。Kennedy が企業と政府、政府と国民の間の対話が現代米国社会の真の現実をあらわしてはいないということを「幻想」(「神話」)と称し、イエール大学の学生たちにその実態を伝えるという文脈である。この文脈においては、分離不定詞はその場面において考慮する内容を絞って特定する働きを持つ。つまり、副詞 *particularly* を *to* 不定詞に挟むことで、議論、主張点のポイントを絞って伝達することができるのだ。

また、下の例 (6) は全米製造業者協会にて行われた演説であるが、副詞 *ever* を *to* 不定詞の間に挟むことで過去の大統領 Mckinley と自身を対比させることにより、そこで演説できるという自身の立場の希少さをアピールしていると解釈できる。

(6) I understand that President Mckinley and I are the only two Presidents of the United States **to ever address** such an occasion. I suppose that President Mckinley and I are the only two that are regarded as fiscally sound enough to be qualified for admission to this organization on an occasion such as this.

(Address to the National Association of Manufacturers, 1961/12/6)

最後に、以下の用例を確認しよう。当例は、第二次世界大戦以後に米国の外交の基本政策として、他地域の独立や同盟を支持するなど、様々な働きかけをしてきたのは、ソビエト連邦や中国といった、特定の国家が米国を凌駕するのに十分な国力を有しないようにするという理由からだ、と述べる文脈である。

(7) The reason that we moved so far into the world was our fear that at the end of the war, and particularly when China became Communist, that Japan and Germany would collapse, and these two countries which had so long served as a barrier to the Soviet advance, and the Russian advance before that, would open up a wave of conquest of all of Europe and all of Asia, and then the balance of power turning against us we would finally be isolated and ultimately destroyed. That is what we have been engaged in for 18 years, to prevent that happening, to prevent any one monolithic power having sufficient force to destroy the United States. For that reason, we support the alliances in Latin America; for that reason, we support NATO to protect the security of Western Europe; for that reason, we joined SEATO to protect the security of Asia—so

that neither Russia nor China could control Europe and Asia, and if they could not control Europe and Asia, then our security was assured. This is what we have been involved in doing. And however dangerous and hazardous it may be, and however close it may take us to the brink on occasion, which it has, and however tired we may get of our involvements with these governments so far away, we have one simple central theme of American foreign policy which all of us must recognize, because it is a policy which we must continue to follow, and that is to support the independence of nations so that one bloc cannot gain sufficient power **to finally overcome** us. (Address at the Mormon Tabernacle, 1963 / 9/ 26)

ここでは、米国政府、あるいは社会が恐れていることが最終的に起こってしまわないように努めるとし、人々に対する警鐘を鳴らしつつ、政府の狙いを的確に説明する役割を担っているということを取り立てて強く表明しているととれる。*finally* を伴う分離不定詞を文末に配置することにより、受容者の意識を向け、強い印象を与えながら演説を終えることに成功している。

本節で見たように、Kennedy は、決して多くないものの演説の随所で分離不定詞を使用しているが、文脈の点から考えても当構造を用いることで、話者たる大統領の伝達事項、主張点を強調できる可能性が高まると考えられる。この主張のメカニズムにさらに説得力を持たせるうえでは、認知言語学の観点の中でもゲシュタルト (Gestalt; configuration) の考え方を適用することが効果的であろう。次節にてまず概略を示す。

4.1.1. 心理学の用語としてのゲシュタルトとゲシュタルト要因

実際にゲシュタルトの考え方を分析に援用するにあたり、この概念を概観する。²

これは元来、心理学の用語で、視野にある対象を1つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用を体制化 (organization) といい、体制化によって形成されるまとまり (構造体) がゲシュタルトと呼ばれる。主たる性質として、「全体の性質は部分の総和でなく総和以上の価値を持つ」「部分の性質は全体の中で規定される」というものがある。ゲシュタルトの概念は、知覚のみならず、記憶、思考、要求、発達、行動、集団特性など、広く心的過程一般に適用され、言語においても、語や構文が個別の用法の総和としては特徴付けられないことからこのことが理解できる。

ゲシュタルトとして体制化される一般的な要因として、ゲシュタルト心理学の観点からは「ゲシュタルトの要因」が指摘される。Ungerer and Schmid (2006: 36) では、それらの要因の主要なものとして、具体的に以下の4つを挙げている。³

- (I) '**principle of proximity**': individual elements with a small distance between them will be perceived as being somehow related to each other;
- (II) '**principle of similarity**': individual elements that are similar tend to be perceived as one common segment;
- (III) '**principle of closure**': perceptual organization tends to be anchored in closed figures;
- (IV) '**principle of continuation**': elements will be perceived as wholes if they only have few interruptions.

本枠組みに基づき、次節では、分離不定詞が演説中でどのような機能を果たしているかについて分析してゆく。

4.1.2. ゲシュタルトの要因の適用

分離不定詞を使用することにより、話者としての大統領の伝達事項を明快にし、強調する効果をもたらし得るとの旨を先に述べた。言及したゲシュタルトの概念のうち、ここでは中でも *principle of proximity* の視点を援用することが適切であると考えられる。

(5) 'Mythology distracts us everywhere — in government as business, in politics as in economics, in foreign affairs as in domestic affairs. But today I want **to particularly consider** the myth and reality in our national economy. (Commencement Address at Yale University, 1962 / 6 / 11, 再掲)

² 本説明においては、クルト (1988)、河上 (1996)、菅井・黛 (2005)、Evans and Green (2006) 他を参照した。

³ (1) には「近接の原理」、(2)には「類同の原理」、(3)には「閉合の原理」、(4)には「連続の原理」という訳が充てられる。(池上ほか訳 1998)

太字下線部の場所では分離不定詞を避けて、以下のような文章にしたとしても、これらが意味するところは同じである。

(5) I want **to consider** the myth and reality in our national economy **particularly**.

しかし、本文の目的語 *the myth and ...* の箇所が長く、副詞 *particularly* が *consider* を修飾しているかどうか不明確であるし、場合によっては副詞の意味が薄まった結果、かえって意味が捉えづらくなってしまふ可能性があるほか、文意を誤解してしまう恐れもある。Ungerer and Schmid においては「人間は近くに存在している言語要素をまとめて一つにとらえる傾向がある」と記述されているが、ここからは意味の繋がりが強い副詞と動詞の原形を隣接させることにより、結果として *to* 不定詞を分離することになったとしても、分離不定詞を避けた場合に比べて意味が通りやすくなると解釈できる。すなわち、目的語が長い場合や、そうでない場合でも文意を明快に伝えたい場合は語と語の間隔が開きすぎるのを防ぐため、可能な限り隣接させたほうが良い、というわけである。さらに演説という媒体では、伝達的手段としては言うまでもなく「音声」が中心であるため、聴衆にとっては、その内容は前から順に理解されることが多い。故に文字情報であれば比較的容易に理解できることであっても、目的語によって動詞と副詞の間に距離を作ってしまうことで、*principle of proximity* で言語を理解する人間には、それらの関連性を認めるのが困難になる可能性が高い。そのような事態を避けるために、分離不定詞は適切かつシンプルな手法として、「話者（発信者）の主張を的確に伝える」という効果を発揮していると考えられる。⁴

4.2. 分離不定詞を「用いた構文」と「避けた構文」を並列した意味の強調

さらに興味深いことに、本調査では分離不定詞を用いた構文と使用を避けた構文とが並列されている用例が複数確認された。こちらでも「分離不定詞を用いることで話者の伝達事項をより強く示すことができる」という点からゲシュタルトの考え方を応用することが可能である。

1つ目は、1961年4月27日に行われた以下の“Address: The President and Press”からの引用である。これは、ニューヨークのウォルdorf・アストリア・ホテルで、アメリカ新聞発行者協会を前に行った演説で、この場において彼は、共産主義との戦いにおいて、冷戦下での機密資料の公開に関して、公式に宣言された戦争と同じ基準を適用することで報道機関に協力を要請した。

(8) ...Without debate, without criticism, no Administration and no country can succeed—and no republic can survive. That is why the Athenian law-maker Solon decreed it a crime for any citizen to shrink from controversy. And that is why our press was protected by the First Amendment—the only business in America specifically protected by the Constitution—not primarily to amuse and entertain, not to emphasize the trivial and the sentimental, not **to simply “give the public what it wants”**— but to inform, to arouse, to reflect, to state our dangers and our opportunities, to indicate our crises and our choices, to lead, mold, educate and sometimes even anger public opinion. ...

本用例は、*primarily to amuse and entertain* の箇所で分離不定詞を避け、*to simply give...* の箇所で分離不定詞の形になっている。筆者はこれらを意図的に使い分けていると判断したのであるが、文字情報として見た際に興味深いのは、後者の *give the public what it wants* といった動詞句の箇所が引用符で括られている点である。文脈から判断すると、ここでは「米国のあるべき報道のスタンス」が論じられている。*give the public what it wants* というフレーズはそれまでに出てきた *amuse, entertain, emphasize the trivial and sentimental* といった具体的な動作を一つにまとめたものであり、これを通して Kennedy はメディア業界の「大衆が欲しがらる記事を与えて彼らに迎合する」姿勢を批判していると捉えられる。前者では *not* と *to* の間に副詞を置くことにより個々の動詞をまとめて修飾しているが、*not to...* の繰り返しの箇所で Kennedy が最も強く伝えたいのは恐らく *not to give the public what it wants* の箇所であろう。そこで動詞句 *give...* に最も近い位置に *simply* を置くことにより、後続する動詞句への「制限」の意味合いを強めようとしていると解釈できる。さらに、

⁴ 演説という「音声言語を中心とした」媒体とゲシュタルト要因との関連について、大森文子先生より御助言・御教示をいただいた。本研究における主張を強めるうえで非常に有益な視点であったと思われるため、ここに特に記す。

not に可能な限り近いところに副詞 *simply* を置いて、「否定」の意味合いを可能な限り強めることも意図していると推測できる。すなわち、ここで使われている副詞がそれぞれ持つ「否定」と「制限」を表す副詞を近づけておくことでそれぞれの意味合いを可能な限り最大化して聴衆に訴えかけ、印象付けられることが可能になるのである。ここで Kennedy が分離不定詞を用いているのは、その効果を狙っているのではないだろうか。

もう一つの例は、1961年6月6日の“Report to the American People on Returning from Europe”からの引用である。これは欧州歴訪から帰国した際に行ったテレビ演説で、Kennedy はドイツの分裂状態について語り、ソビエト連邦の Nikita Khrushchev 首相との会談の経緯や様子などを米国国民に伝えた。

(9) I wanted to present our views to him **directly, precisely, realistically**, and with an opportunity for discussion and clarification. This was done. No new aims were stated in private that have not been stated in public on either side. The gap between us was not, in such a short period, **materially** reduced, but at least the channels of communications were opened more **fully**, at least the chances of a dangerous misjudgment on either side should now be less, and at least the men on whose decisions the peace in part depends have agreed to remain in contact. This is important, for neither of us tried **to merely please** the other, **to agree merely to be agreeable**, to say what the other wanted to hear. ⁵ (※we = Kennedy and Khrushchev)

ここでは、*to merely please* の箇所では分離不定詞が使われている一方で、直後の *to agree merely to be agreeable* (下線) の箇所では分離不定詞が避けられている。*merely* が *to* 不定詞を修飾する共通の副詞として使われていることで、筆者にはその恣意性がより明確に感じ取れるのであるが、こちらは(7)とは逆に、文脈的に(*try*) *to please the other* がまとめの役割を果たす動詞句となっており、*to agree, to be agreeable, to say what the other wanted to hear* の三つが動作の具体的な内容を表している。つまり、Kennedy は国民に対して当時の「敵国」の首脳である Khrushchev に「互いの耳触りの良いことを言って単に媚びた」のではなく、「あくまで一国の国家元首として対等な立場で合意に至った」という内容を印象付けたい意図が、敢えて言語学的に有標な⁶ 分離不定詞を使用することによって浮き彫りになっている。本節では、分離不定詞を用いた構文と避けた構文を並列させたパターンについて考察し、Kennedy が分離不定詞を演説に含める意図の一つとして、ゲシュタルト要因の観点から、聴衆にその箇所に自然と意識を向けるインセンティブを与える可能性が高いためであることを述べた。

4.3. 韻律 (リズム) との関連

Kennedy は、その有名な就任演説を筆頭に、音韻的に優れた演説を行ってきたことは有名である (cf:松尾 1987: 46-50)。既に述べたように、演説は音を伴ってメッセージを伝えるメディアであるため、効果的な伝達を行うためには、受容者が聞いて心地の良いリズムを整えることは極めて重要な要素である。英語の文章、特に韻文において、Leech (1969: Chapter 7) が主要な韻律として以下を挙げている (太字は強勢を置いて読む箇所)。

i) 弱強格 (iambic meter)

The **ploughman** **homeward** **plods** his **weary** way, (ibid: 113)

ii) 強弱格 (trochaic meter)

Mirth with **thee** I **mean** to **live** (ibid: 112)

iii) 弱弱強格 (anapaestic meter)

I am **monarch** of **all** I **survey**; (ibid: 115)

⁵ 言語文化レトリック研究会にて、渡辺秀樹先生より、「本用例では副詞が頻出しており、特に-ly 副詞の多用が目立つ (太字)。中でも用例末尾に位置する副詞である *merely* は本文における意味合いとしても際立たせておくべき副詞として、分離不定詞の形として印象付けることに成功していると思われる。分離不定詞と強意の関連を指摘するのであれば、そこにも言及が必要ではないか」との旨の御指摘をいただいた。筆者にとって、発表時には気づき得なかった視点であり、興味深い点であると考えられるので、談話に含まれる分離不定詞と既出の副詞との関連性に関する問題も今後取り組むことを予定している。

⁶ 本稿脚注2を参照されたい。

iv) 強弱弱格 (dactylic meter)

Ladybird, ladybird, Fly away home, (ibid: 112)

リズムと分離不定詞との関連を中心的話題として扱った文献に、van Draat (1910) がある。彼は特に英語の散文において、副詞を置く箇所によって特定の効果を生み出せると説き、その例として、分離不定詞は以下の5つの強勢パターンにおいて自然な韻律を形成するとしている (ibid: 103-123) (x=弱 (強勢を置かない箇所), / =強勢を置く箇所)。

- ① x / x / (x / x /)
Little did it enter my hand **to even use** the place in summer. (ibid: 108; Elizabeth and German Garden, T.12)
- ② x / x x /
Let us be too grateful for what his nature gave **to rashly conjecture** the effect of modifications (ibid: 115; Preface to *Vicar of Wakefield*, Scott Libr.8.)
- ③ x / x x / x /
It is our interest **to absolutely ignore** these insulting attacks (ibid: 118; Times 16 March 1909)
- ④ x / x x / x x /
To calmly relinquish the struggle at that point would have been the act of Stoic, but not of a woman. (ibid: 119; Th. Hardy, *The Hand of Ethelberta*, Chapter 28.)
- ⑤ x x / x x /
For **to deliberately knock** her head against the certainties (ibid: 120; Stopford Brooke, *Tennyson I*, 272.)

Crystal (1984:30 / 1995: 194) は *Star Trek* に出現する台詞の一部である *To boldly go*⁷ という一節が、英語の自然なリズムに則っており、例えば ‘The curfew tolls the knell of parting day...’ という文章と同様に英語の詩学的伝統に則った韻律を構成すると述べている (‘The tum-te-tum rhythm’)。⁸ これを踏まえ、Kennedy の演説に出現する分離不定詞が現実に英語の自然なリズムを構成しているか、複数の実用例を観察しつつ再考したい。一つ目の用例は、1961年5月に行われた、カナダ議会の合同会議にて行った国際関係と安全保障に関する演説からである。

(10) Both of these measures — improved conventional forces and increased nuclear forces — are put forward in recognition of the fact that the defense of Europe and the assurances that can be given to the people of Europe and the defense of North America are invisible — in the hope that no aggressor will mistake our desire for peace with our determination to respond instantly to any attack with whatever force is appropriate—and in the conviction that the time has come for all members of the NATO community **to further increase** and integrate their respective forces in the NATO command area, coordinating and sharing in research, development, production, storage, defense, command and training at all levels of armaments. (Address before the Canadian Parliament, 1961 / 5 / 17)

通例、不定詞マーカの *to* には強勢が置かれないことから、本用例を上記の基準に沿って強勢のマーク付け(分類)をすると、下のように、x /x x/x x/x というリズム構造となる。これは弱強調 (iambic) ならびに弱弱強調 (anapaestic) が混在したもので、英語散文の音韻としてはありふれたものといえる。

to **fur**-ther in-**cre**-ase and in-**teg**-rate (iambic / anapaestic)

一方、先述の(8)の該当箇所においては、前後の文脈と合わせて考えても、本分離不定詞が弱強調

⁷ Space: the final frontier. These are the voyages of the Starship Enterprise. Its five-year mission: to explore strange new worlds. To seek out new life and new civilization. **To boldly go** where no man has gone before! (Star Trek: The Next Generation.)

⁸ Crystal (1984/1995)では具体的な名称までは述べられていなかったが、Crystal (2006: 126)では‘The curfew tolls the knell of parting day...’の文は弱強五歩格 (iambic pentameter) であると明確に述べられている。

(iambic) を構成する上で重要な存在であることは明白であり、リズムを生み出す役割を果たしている。⁹

本用例以外にも、分離不定詞を採用することによって英語における適正な音調を形成すると判断されるパターンもみられる。以下の用例を見られたい。

(9) ' This is important, for neither of us tried **to merely please** the other, to agree merely to be agreeable, to say what the other wanted to hear. (=9)の抜粋再掲)

上の用例において、該当箇所の強勢の有無に基づいて分類すると、以下のようになる。

to **mere-ly please** the **o**-ther (iambic) (x /x / x /x)
to a-**gree mere-ly** to be agreeable (x x / /x x x/x)

前者は上記のように弱強調が見事に編み出されているのに対し、後者の *to agree merely ...* は分離不定詞を避けてしまったために強勢を置く音節が連続して「かち合う」状態が形成されてしまっている。Crystal (1984) によるとこの状態は 'ponderous' であり、あまり望ましくないもののようなだ。¹⁰ この文構造が成立した動機の一つとして、ゲシュタルト要因が作用すると推測されることは4.2節にて既に述べたが、分離不定詞を使う場合と避ける場合において、音の変調が見られてしまうため、こちらも動機として作用している可能性があるかと確認できる。

さらに下の文は、(7)でみた用例の周辺箇所を抜粋したものである。

(7) ' that is to support the independence of nations so that one bloc cannot gain sufficient power **to finally overcome** us. (=7)の抜粋再掲)

(7)'では、分離不定詞を用いることにより「弱強弱弱強弱強(弱)」の、英語散文における適正なリズムを導き出すことに成功している(*overcome* の語頭の *o*-は第二アクセントとしてカウントした)。

to **fi-nal-ly o-ver-come** us (x /xx /x/ x)

本例からは、分離不定詞を文末に配置し、聴き心地の良いリズムで文章を終えて、聴衆に自身の主張点に関して強い印象を残させよう、という Kennedy の戦略が見え隠れしないだろうか。最後に、*to* と原形動詞の間に複数語が嵌入している分離不定詞の事例も観察したい。分析にあたっては(3)の用例に再び着目する。

(3) ' **To more accurately describe** its role, its title should be changed to the Office of Emergency Planning. (=3)の抜粋再掲)

これを強勢の有無で分類すると、以下のようになる。

to **mor-e ac-cu-rate-ly de-cribe** its role,... (x /x /xxx x /)

副詞 *accurately* に音節数が多いことで、van Draat の提示するリズムには一見そぐわないようにも思われるが、強勢を伴う音節がかち合うことはなく、実際には音節ごとに区切って発音することはほぼないため、表記以上に弱音節の連続が音調を崩すことに直接繋がらないと判断できる¹¹。以上のように、複数語の副詞(相当句)が挟まれた場合でも、分離不定詞が韻律に沿って使用される

⁹ 渡辺秀樹先生より御指摘をいただいた。

¹⁰ 英文が「自然な英語のリズム」にかなっているどうかの議論は韻文を対象としている場合が多く、その規則が散文テキストに応用できるか、断言することは困難である。散文を対象とした文献である van Draat (1910)は「*to* + 副詞 + 動詞の原形」(あるいはその前後数語)というかたまりのみに着目していたが、むしろ散文の場合は分離不定詞を含む文章全体の韻律を確認した方が望ましいかもしれない(本稿は便宜的に前者を採択した)。

¹¹ ネイティヴのインフォーマントによると、この箇所は実際には「弱強弱強弱強弱強 (x/x/xx/)くらいに聞こえたのではないかと、との意見であった。

場合があることが明らかになった。

Kennedy の演説は、かねてより音韻的效果を重視したものであることが指摘されてきたが、これは単なる印象などではないこと、そして分離不定詞という要素を介在させて文章のリズム感を整えられている場合がある可能性も示唆された。無論、予め示された弱強勢の分類に従わない用例も一定数見受けられる。それらは別の文体的事由によって用いられたのであるが、リズムを整えることは、談話においては自身の主張点や強調したい事柄を聴衆の耳により残し、結果として内容的に正確に伝達できることを意味するため、特に演説においては分離不定詞が主張点を強調するための談話戦略 (ディスコース・ストラテジー) として機能するという主張を支持する根拠の一つとなり得る。

一方で、音韻的側面の分析法に対しては、限界と呼べる点もある。今回のように音声中心の媒体を用いてリズムの点から言語を分析しようとする場合、音声データ (あるいは映像データ)などを伴った、視覚・聴覚的に訴えるデータを提示することで論の説得力を高められる可能性が高いが、その開催時期が古いものや知名度の点で有名と言い難い演説に関しては音声・映像データ自体が残されていないケースもある。その場合には例えばどの箇所に強勢を置くか、という点も分析者の知識や辞書の表記などに頼りつつ、書き言葉テキストの一つとして分類せざるを得ない。これについては今後の検討課題となる。

5. おわりに

以上、本研究では、John F. Kennedy が大統領であった時代に行われた演説の中から分離不定詞が用いられていた用例をピックアップし、その修辭的效果に関して、認知言語学の観点並びに音韻的側面から分析を行った。

Kennedy は決して頻繁に分離不定詞を用いていたわけではなかったものの、それでも自身の主張点や任務を明確にするなど、要所に分離不定詞を織り交ぜることによって、聴衆の関心を的確に引きつけようと努めていることが読み取れ、その談話戦略の一つとして、当時「破格」とされ、使用が忌避されがちであった分離不定詞を自らの演説に織り交ぜたのではないだろうか。その効果に対し、ゲシュタルト要因や韻律といった多面的な視座から説明を加え、従来の研究では殆ど指摘されてこなかった幾つかの新しい知見を得ることができたのは特筆すべきだ。

本論では Kennedy に対象を絞っているが、現時点ではそれが彼の演説にのみ認められる特徴といえるかの十分な比較検討には至っていない。他の(著名な)大統領が演説を行う際に用いられた分離不定詞からも同じような効果が得られるかという点を中心に、今後引き続き調査を行い、究明してゆく所存である。

謝辞

本稿は 2023 年 3 月 7 日開催の言語文化レトリック研究会での筆者の発表に基づき、大幅な加筆修正を施したものである。渡辺秀樹先生、大森文子先生、中畠浩貴先生、および司会を御担当くださった田村幸誠先生をはじめ、出席者の方々より数多くの貴重なコメントやアドバイスを賜った。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

参考文献

- 明石和康. (2012) 『大統領でたどるアメリカの歴史』(岩波ジュニア新書 723) 東京: 岩波書店.
- Calle-Martín, J., & Miranda-García, A. (2009) On the use of split infinitives in English. In: *Corpus Linguistics: Refinements and Reassessments*. 347-364. London: Brill.
- Close, R.A. (1987) Notes on the split infinitive. *Journal of English Linguistics*, 20 (2), 217-229.
- Crystal, D. (1984) *Who cares about English Usage?* London: Penguin Books.
- Crystal, D. (1995[2003]) *The Cambridge Encyclopedia of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2006) *The Fight for English: How Language Pundits Ate, Shot and Left*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, V. and M. Green. (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Givón, T. (1995) *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gonzales, W.D.W. and Dita, S.N. (2018) Split infinitives across World Englishes: a corpus-based investigation. *Asian Englishes*, 20 (3), 242-267.
- 廣田友晴. (2021) 「否定分離不定詞の変遷: 1990年代から2010年代における話し言葉の分析を通じて」『語法と理論の接続をめざして-英語の通時的・共時的広がりから考える17の論考』東京: ひつじ書房.
- Huddleston, R. and G.K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- 河上誓作 (編著). (1996) 『認知言語学の基礎』東京: 研究社.
- クルト, コフカ (著), 鈴木正彌 (完訳). (1988) 『ゲシュタルト心理学の原理』東京: 福村出版.
- Leech, G. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longman.
- 松尾弑之. (1987) 『大統領の英語』東京: 講談社. (講談社現代新書)
- 岡部朗一. (1994) 『大統領の説得術: 人を動かすレトリック』東京: 講談社. (講談社現代新書)
- Perales-Escudero, M.D. (2011) To split or to not split: The split infinitive past and present. *Journal of English Linguistics*, 39(4), 313-334.
- Phoocharoensil, S. (2012) The English split infinitive: A comparative study of learner corpora. *International Journal of Research Studies in English Learning*, 1 (1) 1-12.
- 菅井三実・黛穂高. (2005) 「言語能力と認知機構の互換性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』27: 63-71.
- Swan, M. (2017) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Ungerer, F., and H.J. Schmid. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Routledge. (= F. ウンゲラー・H.-J. シュミット. 池上嘉彦ほか訳. (1998) 『認知言語学入門』東京: 大修館書店.)
- van Draat, F. (1910) *Rhythm in English prose*. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.

データベース

Miller Center, *Presidential Speeches*. Virginia University.
<https://millercenter.org/the-presidency/presidential-speeches>.